

新潟県小学校
校長会報

題字…今山政三郎氏

発行所
新潟県小学校長会広報部
新潟市中央区万代1-3-30
万代シティホテルビル3階
TEL 025-290-2231
FAX 025-245-6060
E-mail: nksgko@nigata-inet.or.jp
印刷所 株式会社 文久堂



成功の循環

新潟県小学校長会 副会長
小海 信幸

令和五年度の県教員採用選考検査の出願状況によると、小学校の倍率は約1・7倍であり、この三年間、本県の小学校の倍率が年々低下している状況です。近年、教員の多忙化が問題となり、文部科学省のツイッター「#教師のバトン」でも、教員の魅力よりも過酷な労働環境等の書き込みが多く、ブラックなイメージが広まっていることも少なからず影響していることでしょう。

各校においては、行事の精選や会議等の縮小、校務分掌の軽減、ICTによる校務の効率化など、知恵を結集して働き方改革を推進し、超過勤務時間の縮減に努めていることと思います。

ただし、超過勤務時間の縮減は一つの数値目標ではありませんが、このような数値の結果を急ぎすぎると、組織内に摩擦や対立が生まれ、不安や疑心暗鬼から守りに入り、行動が消極的で協働も進まず、さらに結果が悪くなる、と

いう失敗の循環に陥りかねません。

企業の組織活性化でよく引用される、M I Tのダニエル・キム教授が提唱した「成功の循環」は、対話や交流による信頼関係を築くことで、多様な視点から気付きが生まれ、自発的な行動や協働が進み、よい結果となり、さらに信頼関係が深まる、というものです。

つまり、学校課題についてよい結果を出すためには、校長が率先して教員との信頼関係を築き、また、教員同士の良好な関係性を育成するという「急がば回れ」的な学校経営が求められることとなります。

ブラックなイメージを払拭し、学生が、単なる職業としてでなく、自己の夢の実現という高い志により教員を選択することに繋がると、校長として、教員が働きがいと生きがいを実感できる学校経営に全力で努めたいものです。(長岡・三島 阪之上小学校)

令和四年度
第一回 県小評議員会 (報告)

日時 六月十六日(木) 十四時～十六時十五分
会場 上越市【高陽荘】

- 一 開会の挨拶 佐藤会長
今年度は代議員会を対面で実施でき、村上市岩船郡小学校長会に感謝する。非違行為が発生している。校長のリーダーシップの下、取組強化が必要である。また、文部科学省では公立小中勤務実態調査を予定している。業務改善につなげていきたい。人権教育、同和教育、環境教育等、学ぶ機会の獲得や情報収集を行い、社会の変化に迅速に対応する取組が必要である。
- 二 議長選出 妙高地区評議員
- 三 報告
・会務報告・全連小・関プロ関係
- 四 協議
(一) 各部の事業計画について
1 対策部
市町村教育関連予算等に関する調査を継続する。人的配置等の予算要望のため、速報値を示していく。各市町村の首長要望作成資料につなげた教育を提供したい。
- 2 福利部
県中校長会や退職校長会と連携して情報収集や調査研究を行い、教職員の給与水準や雇用促進の要望に生かす。また関連団体との連携を深め福利向上に寄与する。今年度は調査方法を変え業務改善を図った。
- 3 研修部
今年度は、地区別研究集会を九月に行う。各開催地校長会が運営する。研修主題「未来を拓く知を磨き」ともに生きる子どもを育てる学校経営」の下、分科会を充実させる。
- 4 広報部
会員の連携と学校運営の改善充実に資するよう、各校長の活動や当面の課題に関する情報を提供する。
- (二) 令和四年度全連小島根大会、今後の関プロ・全連小大会について
- (三) 令和四年度「要望書」について
- 五 連絡
次年度代議員会
令和五年五月十日(水)
主管 三条市小学校長会
- 六 閉会の挨拶 小海副会長
校長会の「要望書」に集約されたのは「校長の悲鳴」である。我々校長は、日々の教育活動を充実させ、改善を進めていくことが大切である。
- (広報部副部長 松澤 ゆりか)

関東甲信越地区小学校長研究協議会・群馬大会の提案発表

六月九日(木)～十日(金)
高崎市 Gメッセ群馬 他

加茂市立須田小学校 前田 友晴

阿賀野市立安田小学校 石黒 篤志

一 提案主題

子どもが未来を切り拓いていくための資質・能力を育む教育課程の工夫

二 研究の概要

(一) 資質・能力の確実な育成

1 四つのしかけ(学習課題、拡散、収束、まとめ)を意識した授業の実施により、一時間の中で身に付けさせる技を意識した授業づくり。

2 対話力を高めるために、「話す・聞く」の学習を重視し、「ことばの力」を国語以外の学習でも活用。

(二) 教職員組織の活性化と能力向上

1 校内研修の組織を、一・三・五年(国語)と二・四・六年(道徳)に分割。国語や道徳など、縦を意識した指導を行うために、同じ領域や内容を同時期にした指導計画に変更。

2 ICTの能力向上のために、意図的な遠隔授業や計画的な全校一斉のICTを活用した授業を実施。

(三) 教育課程の工夫

1 「須田dY科(すたでいか)」生活科や総合的な学習の時間の年間指導計画に「ふるさと・須田」

を学ぶ、「須田dY科」を位置付け、各教科等の学習で身に付けた技を活用する学びを全学年で実施。

2 オリパラ教育

共生の視点を高めるために、パラ種目体験やホストタウンの活動、諸外国の食を味わうオリパラ給食運動会でのパラ種目の要素を入れた種目や「IMPOSSIBLE」を活用した授業を実施。

三 研究の成果と課題

(一) 技を意識したことにより、与えられた課題やテストなどで、自分の考えを書く子どもが増えた。

(二) 低・中・高学年で研究を組織したこと、教員同士が授業について話し合い、他学年の学習と関連付けて授業を実施することができた。今後も教員同士が学び合うための時間の設定が必要である。

(三) 地域のお年寄りやボッチャで交流したり、縦割り班でボランティア活動を実施したりするなど、子どもたちが学習したことやできることを積極的に活用する姿が見られた。

一 提案主題

「自分の命は自分で守る」児童の育成と安全・安心を目指した学校経営

二 研究の概要

自然災害や日常生活に潜む危険から掛け替えない命を守ろうとする児童の育成を目指した。そのために、命を守る行動をとろうとする意識の醸成と安全・安心な環境整備を学校経営方針に位置付け、全職員で取り組んだ。

(一) 「自分の命は自分で守る」意識を醸成する教育活動等の推進

1 全校朝会の講話、学校だよりの巻頭言等で身近に潜む危険の認知を促し、自分の命は自分で守ることの意識化を図った。これらは、校長自身ができる大切なことだと考えた。

2 生徒指導部・特別活動部に働き掛け、学校生活のきまりを児童の手で見直し、児童自らが安全・安心な学校生活について考えられるようにした。

3 学校防護部に働き掛け「防災教育プログラム」を計画的に実践し、避難訓練や道徳科の授業と関連付けながら指導できるようにした。安全・安心な環境整備に向けた取り組みの充実

1 安全点検の方法を見直し、全職員で当事者意識と危機管理意識をもち、安全・安心な環境整備を目指した。

2 学校ボランティア組織を立ち上げ、安全・安心に関わる人的な環境整備を目指した。

三 研究の成果と課題

(一) 二学期末の調査で、「自分の命は自分で守る行動がとれた」と自己評価した児童が98%、全職員が自身の安全・安心への意識が高まったと肯定的に評価した。児童・職員ともに意識の高まりはあったと言える。

(二) 本研究で取り組んできたいくつかの活動はどれも目新しいものではない。一つ一つではなく、各活動を関連させることで、学校の中に安全・安心な生活を目指す風土を生み出すことが重要である。

(三) 意識は高まりつつあるが、実生活や行動に十分生かされていない。児童に行動変容が見られたとした職員が52%と低い値にとどまった。実生活につなげる働き掛けがさらに必要である。また、学校ボランティアを有効に活用できなかったことも大きな課題である。



特別寄稿

繋ぐ仕事

頸城酒造株式会社代表取締役

八木 崇博

△はじめに▽

当年四十六歳、私は上越市柿崎区にある造り酒屋の蔵元です。新潟県は全国一造り酒屋が多く、自他ともに認める日本酒王国です。全国的に見ても規模が大きく有名な酒蔵が多数存在しますが、残念ながら当蔵はそうではありません。そんな私が、今回の寄稿のご依頼をいただいたことは、甚だ恐縮至極ではありますが、地域とともに生きる「地酒蔵」ということを、評価いただいたものと勝手に思っています。地域の自然・風土から生まれる水、米、そして伝統技術が揃うことで、始めて真の地酒を造ることが出来ます。地域という根幹があつてこそ、我々の生業が成立します。百年先も残る地酒蔵を目指し、地域とともに生きる当蔵の取組を紹介いたします。



△柿崎名水農醸プロジェクト▽

平成名水百選「大出口泉水」が流れる棚田で酒米を作り、その米をその名水で仕込んだ酒「久比岐和希水（わきみず）」を造り、名水と地域を発信する事業です。消滅が危惧される集落から流れ出る名水と、その名水が流れる棚田を後世に残すために、地元農業者団体「かきぎきを食べる会」とともに、平成二十四年より開始。活動のかがあり、本年初めてイターン移住者を一名獲得。名水と棚田の存続に向けた活動を加速させています。

△ハタチにカキザキを呑むプロジェクト▽

柿崎の小学生を対象に小学校と一緒に、故郷の自然・文化を学び、故郷に誇りを持ってもらうために実施をしている事業です。小学六年生を対象に、大出口泉水が流れる棚田を舞台に、田植え、棚田の学び、稲刈り、地域食材の飲食等、五感を使い柿崎に触れてもらいます。そして、その米を使用した酒造りを見学、学ぶことで、柿崎だから

生まれる「日本酒」という地域の文化を伝えます。子どもたちが、植えて刈り取り、見学したお酒を当蔵で八年間貯蔵、二十歳になった際に、子どもたちが作成した世界で一枚の未来の自分に向けたオリジナルラベルを貼り付けプレゼントします。このプロジェクトは令和二年より開始し、本年三年目の取組の最中です。

△持続可能な柿崎農醸プロジェクト▽

柿崎では、農業人口の減少により、耕作が容易な平場においても耕作放棄地が広がっています。当蔵では、後継の担い手として負荷がかかってきている若手農家を支援することで、耕作放棄地をできる限り減らし、地域農業の継続に向け役に立ちたいと考えました。具体的には、四月から九月の農繁期において、当蔵社員が在籍型出向という形で、要望をもらった農業者の支援に向かいます。冬場に農家が酒造りに来る、従来の「蔵人制」の逆バージョンです。本年四月より本格事業をスタート、初年度は三組の農家の支援を実施しています。

△繋ぐ仕事▽

ご紹介をした事業すべてに連なるコンセプトは、「繋ぐ」です。地域を未来に繋げるために、環境を、農業を、

そして子どもたちの心を地域と繋げるために実施をしている事業です。いずれも大切ですが、私が最も想い入れがある事業は、子どもたちと地域を繋げる事業です。人がいなくなれば、環境も農業も関係なくなりますので、子どもたちこそが地域の未来そのものと思っています。ただ今の時代に、我々地域の人間だけで、子どもたちを地域と繋げることが出来るかと言えば、それは無理です。学校の協力が必要不可欠です。現在我々が行っている事業が成立し、皆さんに意義ある事業と認めていただけるということであれば、それはあくまでもご協力いただける小学校と先生あつてこそです。そのような意味においても、素晴らしい先生たちとの出会いに、深く感謝いたしております。

△結びに▽

私は造り酒屋の息子に生まれ、地酒を通して「繋ぐ」役割を課せられたと考えています。校長先生たちが担われる極めて重要な役割に比べれば、気楽な役割と理解をしていますが、それでも自身の仕事に明確な役割があることを幸せと感じています。家業は六十歳で引退と心に決めています。それは素晴らしい先生たちに学ばせていただき、より良い形で次世代にバトンを繋げることができるよう頑張ります。

市
都
指
定
郡
政
令
郡
政
令
郡
政
令

お互いの顔が見え 繋がりを実感できる校長会

魚沼市小学校長会

魚沼市は越後三山に連なる山々に抱かれ、清らかな水と緑に育まれた美しいまちである。豊かな自然、歴史、文化を活かした教育を展開し、「自ら考え、自ら学ぶ創造力に溢れた人間性豊かでたくましい子ども」の育成を図っている。また、今年度より「新・温かい学級づくり推進事業」を中核として、「多様性を認め合い、主体的に学び合う学級づくり」の取組を推進している。

市長や教育長、教育委員を交えたグループ協議を行っている。昨年度は、「働き方改革」について現状と課題を共有し、今後の取組の方向性を協議し、各校の取組を促進することができた。同日に開催が予定されている懇親会が、昨今の社会情勢により実施できていないことが大変残念である。

魚沼市小学校長会は、九名の会員で構成されており、年間十一回の定例会では、各種会議の報告や行事等の情報交換、研修を行っている。学校規模も異なる少人数の組織ではあるが、「お互いの顔が見えること」「意思統一が図りやすいこと」などが強みである。些細なことでも相談できる雰囲気があり、各校の危機管理や生徒指導上の問題と対応策などについて細かな情報交換を行い、校長相互の距離感を縮めている。また、教育委員会、教育振興会、中学校長会等との連携も充実しており、着実に成果を上げてきている。

本年度よりコミュニティ・スクールが全市一斉に導入された。地域とともに歩む特色ある学校づくりに向け、お互いの顔が見える「温かい校長会」として取組を継続し、魚沼市の教育発展のために努力していく。

一回、小中学校長会が合同で開催する教育懇談会では、テーマを設定し、

堀之内小学校 石津 忠

学校紹介

心をつなぐ藤塚浜大漁太鼓

新発田市立藤塚小学校

藤塚浜大漁太鼓のはじまり

藤塚小学校は、来年度に創立百五十年を迎える。校区は古くから漁師町として栄え、笛と太鼓の演奏が伝えられてきた。しかし、時代とともに伝承者が少なくなり、「このままでは地域の伝統が失われてしまう」「藤塚浜の優れた気質と伝統を子どもたちに継承させたい」と、当時の山際孝直校長が仁平和二氏に作曲を依頼した。「春」「夏」「秋」「冬」の四曲から成る笛と太鼓の曲が当時の六年生によって披露されたのは一九八〇年九月。以来、演奏する子どもたちは「〇代目」と呼ばれ、現在の五・六年生は四十三代目にあたる。



曲の特徴

曲は、季節の海や地域の様子をモチーフにしている。四季折々の喜びや賑わい、自然の勇壮さや恵みへの感謝が曲に込められている。

春…出漁の喜び春の大漁
夏…大きな海浜のにぎわい七夕送り

秋…大漁浜の喜び盆踊り
冬…日本海の荒波
地域の七夕送りや盆踊りで演奏されてきた笛や太鼓が原型のまま入っている部分もある。

藤塚浜大漁太鼓に込めた思い

卒業生でもある保護者から指導していただき、運動会では堂々とした演奏を聞かせた。五年生は、大漁太鼓の歴史について調べ、学習を通して最高学年に向けて自覚を高めつつある。今後、地域の行事でも演奏する予定であるが、先代の中学一年生も演奏を披露する。また、高校三年生も卒業を前に大漁太鼓を演奏する。来校した卒業生は「私〇代目なんです」と笑顔で胸を張る。

藤塚浜大漁太鼓は、大人になって、故郷を離れても、同級生同士の心をつなぎ、母校と地域への誇りとながりを確かめるものとなっている。

(小林 隆裕)

県小学校長会
HPへアクセス



学校経営に役立つ
情報満載